

吉 村 辰 夫 (よしむら たつお) —————

明治37(1904)年東京市小石川区(現、東京都文京区)  
白山御殿街に生まれた。昭和3年東京帝国大学工学部建築学科を卒業。同級には前川国男・谷口吉郎その他多くの著名人が居る。

当時、建設の取締りは警察が行っており、吉村氏もふり出しほは、警視庁の建築技師であった。昭和7年、内務省にあった都市計画東京地方委員会の技師となり、ここで6年間、草創期の都市計画に関わることになる。その頃、街路計画は石川栄耀技師、公園緑地計画は北村徳太郎氏が担当していたが、用途地域制を吉村氏が主任として担当、私事ながら、筆者も吉村氏の指揮を受けて、資料の蒐集や計画の作成に当たった。三者いずれも、信念を持った論客で、時間を忘れた討議が何日も続いたように覚えている。その調整に当たる高橋登一事務官も大変だったことと思う。

「空地地区」の制度というのは、空地を多く取った厳しい容積地域として考えられ、当時全国を管轄していた内務省の菱田厚介技師(「都市計画」144号で紹介)と吉村氏の協力によって造りあげられたものと考えられる。郊外の住宅地等は各戸に日照が得られるように配慮されたもので、隣地境界線からの距離や高さの制限などもか

早 川 文 夫

(名古屋大学名誉教授)

なり厳しいものであった。とかく利便一辺倒に流れる都市計画に、人間性の理想を掲げた一石であつたと解釈することもできよう。

そのうち、戦雲が次第に広がり、吉村氏も短い一生の終わりに近い1~2年を大陸に赴き、上海、広東等の都市計画や建築規則の制定に当たることになる。帰朝後、神奈川県の建築課長となり、工場の発展や防空等いろいろの要務にその才腕が期待されたが、太平洋戦争の開始数ヶ月前、昭和16年5月に病のため急逝されて行った。

吉村氏の性格は明朗快活で誰にでも好まれた。仕事は熱心であったが、職場を離れても談論風発して、人々を惹きこんで了う魅力があった。数えればもう半世紀以上にもなるが、吉村さんのあの談笑の姿は、まぶたを閉じれば、今でもすぐよみがえって来る。

